

プリマドール

interlude

第5話

「早春の珈琲」

◆執筆:丘野塔也
◆挿絵:まろやか

結霜ガラス越しに、星が瞬いてい

る。
閉店後の、どこか心地よい静寂に包

まれている店内。
わずかに窓を開けると、新春のひん

やりとした空気が吹き込んできた。
真冬の時期に感じるような、刺すよ
うな冷たさはない。肌寒さの中にわず
かな暖かさを内包しているような、こ
の時期独特の空気があった。空はまだ
まだ澄んでいて、夜空を輝きが彩って
いる。

宇佐美「……おっと」

お湯が沸き立つ音がして、蒸気が外
に逃げ出していく。コンロの火を止め
ると、やかんを持ち上げた。傍らに
は、濾過布の上にたつぷりのせた珈琲
豆。そっとお湯を落としていくと、ぽ
こぽこと挽き豆が膨らむと共になんと
も香ばしい匂いが広がった。

宇佐美「うん、こんなものかな」

カップの半分ほど珈琲を入れて、同
じくコンロで温めていたミルクを同量
注ぎ入れる。たつぷりの砂糖を入れる
と、ミルクコーヒーのできあがりだ。

宇佐美「箒星さん、味見してもらって
もいいですか？」

厨房にいる人形に声をかける。

箒星「うーん……」

キッチン台の前でじっとしながら、
なにやら上の空。手にはカタログのよ
うなものを持っている。

宇佐美「箒星さん？」

箒星「あつ……はい、ごめんなさい。
ぱーっとしちゃってました」

小さく声をかけると、弾けるように
顔を上げる。

宇佐美「珍しいですね」

箒星「つい、うっかり。ミルクコーヒ
ーの試飲ですねえ」

両手でカップを受け取っている。

箒星さんは、ここ喫茶・黒猫亭の人
形だ。厨房係で、飲み物や料理のレシ

ピはすべて彼女が作ったもの。筆まめ
な彼女は事細かに調理法をノートに記
してくれているので、それを参照すれ
ば同じように料理を作ることができ
る。とはいえ、何事にもコツはあるも
ので、まったく同じおいしさというわ
けにはいかない。

雇われとはいえ、ここ黒猫亭の店長
としては日々練習しないとイケない。
そんなわけで、今日は珈琲を淹れてみ
たのだ。

箒星「おいしいです！」

宇佐美「本当ですか？」

箒星「はい、とっても！ 嫌な苦みも
無いですし、珈琲もミルクに負けてい
ません。強いて言うなら……」

宇佐美「言うなら？」

箒星「ちよつと甘いですねえ」

宇佐美「うっ……スプーン3杯を守つ
たつもりなんですが」

箒星「ふふっ、山盛りにしちゃったん
じゃないでしょうか」

甘い物が好きなのは事実なので、そ
の気持ちが無知らずのうちに調理
の手に反映されていたのだろうか。

箒星「でも、とってもおいしいと思ひ
ます。うさ店長もどうぞ」

宇佐美「あ、すみません」

カップを返却される。燃料の都合
で、人形は人間と同じものを食べすぎ

てはいけない。

宇佐美「まず……あ、おいしい……」

これならお店に出しても、なにも恥
ずかしくはないだろう。ここしばらく、
ずっと淹れ方を勉強した甲斐があった。
宇佐美「ところで箒星さん、なに見て
たんですか？」

箒星「実は……先日、出入りの業者
さんからこんなカタログをいただきま
して」

宇佐美「これは……サイフォン式珈
琲？」

箒星「はい、なんでも蒸気圧を利用し
て抽出するんだそうです。皇国で商品
になるのは初めてだとか」

宇佐美「なんとも不思議な形ですね」

箒星「味わいもよく、見栄えがするの
でお客様も注目するのではと思ひま
して」

宇佐美「確かに……」

まるで実験器具のような外観。風船
のような丸いガラスでできたそのフォ
ルムには惹きつけられる。

宇佐美「ひとつ黒猫亭に入れてもよさ
そうですね」

箒星「わたしもそう思ったのですが、
問題は値段でして……」

宇佐美「確かに……だいが、高いです
ね」

カタログを確認する限り、だいがい



いお値段がする。

宇佐美「うちのいまの売り上げでは、ちょっとこれは」

箒星「そうですよねえ。面白そうだと思うんですけどね……」

頬に手を当てて、小さくため息をついている。

箒星「サイフォン式珈琲、気になります……」

彼女なりに、黒猫亭の名物を作ってくれようとしたんだろう。その気持ち

は嬉しいし、なんとか答えてやりたいが……。

灰桜「うささん、箒星さんっ」

箒星「灰ちゃん、お仕事お疲れ様ですよー」

ぴょんぴょんと弾むような足取りで、灰桜がやってくる。

灰桜「あ、あの、こんな落とし物があつたのですが、これはお金でしょうか……!」

ぴらりと一枚の紙片を見せる。

宇佐美「ああ、これは新春福引きの抽選券だね」

灰桜「みゆみゆ、福引き……?」

宇佐美「簡単に言うとかじ引きさ。商店街で十銭分の買い物をすると貰えて……」

箒星「現金……?」

宇佐美「取りに来るかもしれないから、レジで保管しておこう」

箒星「あの、うさ店長」

宇佐美「はい?」

箒星「それに賭けましょう」

宇佐美「もしかして、サイフォン式珈琲ですか?」

箒星「もちろんです。商店街でパン五十斤、人参大根蓮根それぞれ二百本ほど買えばそれなりの抽選券が……」

宇佐美「それ、どうやって保管するんですか?」

箒星「パンは揚げれば日持ちしますし、野菜は酢漬けにすれば大丈夫ですよー。あとあと、なにか買う物は……」

灰桜「牛乳なんていかがでしょうっ!」

箒星「それですよー! ミルクコーヒーは人気ですし、百本ほど注文しちゃうましようっ」

宇佐美「冷蔵庫に入りきりませんって!」

箒星「瓶詰めになれば大丈夫です」

宇佐美「瓶詰め……?」

箒星「はい、従軍中作ったことがあります。瓶を煮沸して、コルクと蠟で……」

宇佐美「手段と目的が逆転してませんか?」

箒星「抽選で、現金を……サイフォン式珈琲を当てましょうっ!」

灰桜「よく分かりませんが、当てましょうっ!」

* * *

数日後――

宇佐美「いらっしやいませー!」

箒星「いらっしやいませえ……!」

さすがに鴉羽さんに怒られてしまつて、しばらく店頭で呼び込みする羽目になってしまった。

宇佐美「揚げパン漬け物サンドはいかがですか?」

箒星「ミルクコーヒーとのセットになりますよー」

なんとも珍妙な組み合わせだが、道行くひとは時折足を止めてくれる。

通行客「ほう、これは……?」

ひとりの紳士が興味深げに見つめるのは、店頭の小机に飾りつけた最新鋭の抽出機械。宣伝も兼ねて実演して見せていた。

箒星「こちらのサイフォン式珈琲で、薫り高い一杯をお淹れします!」

箒星さんは胸を張って、得意げに説明した。

次号予告

すこしずつ暖かくなってきたこの頃、黒猫亭にも春がやってきます! 次回も灰桜はじめ、人形たちが織りなすほっこりした喫茶店でのひとときをお届けしますので、ご期待ください。さらに次の展開も予定していますよ……!

『プリマドール』公式サイト

公式Twitter:@primadoll_pr

